FROM United Kingdom

中野香織

㊽不動の上唇男とぽわん唇女

「入れ歯演技」に「入れ歯口」！　これまた新しい切り口の評論ですね。唇が乾いた入れ歯にひっかかるかどうかなんて、敦子さん（と歯科医）の他にいったい誰がチェックを入れていましょう？

そうそう、アラン・リックマンの乱杭歯とジェレミー・アイアンズのみそっ歯というご指摘ではっと思い出したことがあります。イングリッシュ・ジェントルマンがよしとした表情のひとつ、「スティッフ・アッパー・リップ」です。上唇をきっと緊張させて歯を見せないことなんですが、これまで「人の意には従わない」という強い精神的態度の表明とされてきたこの表情、ほんとはさ、がたがたの歯を見せたくなかっただけだったりしてね。なんちて。

歯並びはともかく、「不動の上唇」は、今でもイギリス男子の魅力として健在よね。ダニエル・クレイグを見てあらためてそう思いました。グウィネス・パルトロウが薄幸の才女シルヴィア・プラスになる「シルヴィア」で、夫で桂冠詩人のテッド・ヒューズ役で出てくるダニエルなんですが、知的な翳りの下に野性的な激情を隠した魅力でむんむんしてるのね。その翳りを作る要素のひとつに、「歯の印象がないこと」もあるような気がします。いや歯はあるんだけど、上唇で隠れて記憶に残らないの。

これが笑ったときに粒揃いの白い歯がずばばば～んと並ぶトム・クルーズみたいな口元だったりしたら、もうダメよね。あの口元の光景は、外に対して開かれている感じをよしとする、きわめてアメリカ的なものですね。もちろん、白い歯の魅力が万国共通であることは認めますが、暗さあってのイギリス男の魅力には、ジャマかも？

実はこの「シルヴィア」でのダニエル以上の見ものは、直情ゆえに醜行をするグウィネス七変化。モテる夫の帰宅が遅いと相手を調べて暴れる。他の男を誘惑しようとして不首尾に終わる。もう痛ましくて、女として純粋すぎるのはいかがなものかと、妙な他山の石になったグウィネスでした。

一方、このビッチぶりはあっぱれ、と心底羨望したのが「ボン・ヴォヤージュ」のイザベル・アジャーニで、齢50にしてブリッコ演技全開で男たちを手玉にとり放題。悩殺の武器は、まつげばちばちの上目遣いもさることながら、なんといっても、あの口元ですね。ぽわんと開いた小さな唇からこぼれる、真珠のような歯2、3本。このミステリアスな「ちら見えの歯」が50にして小悪魔、の最終兵器にも見える。口の大きさだけジュリア・ロバーツやキャメロン・ディアスなわたしにはしょせん遠い光景ゆえ、まぶしさひとしおでございました。

ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織

「シルヴィア」
シネスイッチ銀座にて12月公開

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

オブジェ制作＝井上陽子